

時間の推移とモノの変化

考古学の研究方法

考古学は、遺跡調査から得た情報（遺構や遺物など）をもとに、過去の社会的・経済的・文化的な人類活動を考察する学問です。

過去を対象とする学問では、過去に起こった出来事を時系列に沿って復元する必要があります。これは編年研究と呼ばれ、考古学の出発点となっています。編年研究の方法は色々ありますが、考古学において基本となるのは、地質学から影響を受けた層位学的方法と、生物学から影響を受けた型式学的方法です。

古いものほど下にある～層位学的方法～

地質学で編み出された法則に、「地層累重（るいじゅう）の法則」と呼ばれるものがあります。これは、17世紀後半にデンマーク人科学者ニコラウス・ステノが提唱し、18世紀末にイギリス人地質学者ウィリアム・スミスにより定立されたもので、連続して上下に堆積した地層においては、下のものほど年代が古く、上のものほど年代が新しいという原理です。現在では「あたりまえじゃないか！」と感じられる法則ですが、考古学ではこの原理を利用し、地層中に含まれる遺物や遺構の年代の相対的な先後関係の判別をおこなっています。

モノの変化を追う～型式学的方法～

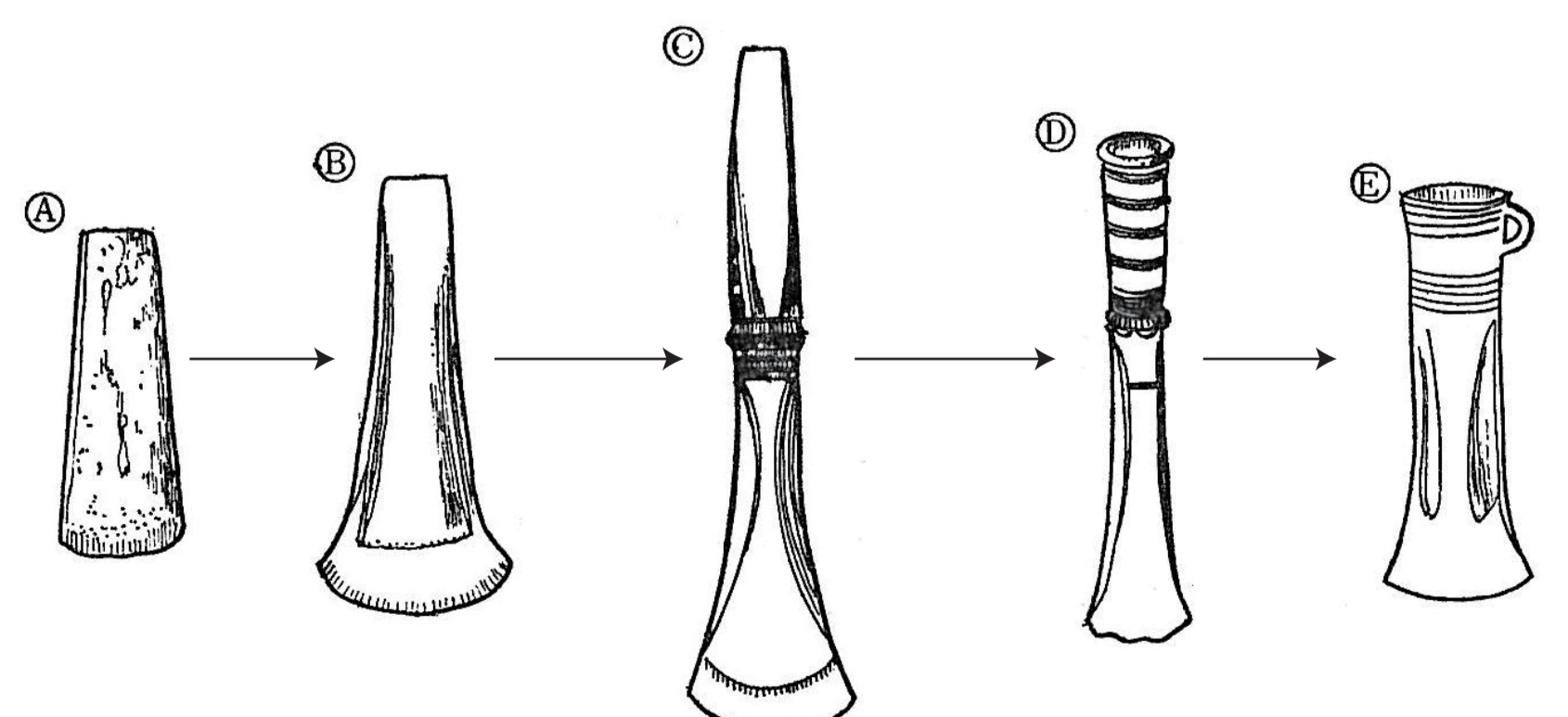
時間の経過に沿ってモノの素材や形態が変化することに着目し、型式組列 (seriation) を組むことを型式学的方法と呼びます。この方法は、19世紀後半にスウェーデン人考古学者オスカル・モンテリウスにより確立されますが、19世紀半ばにイギリス人科学者チャールズ・ダーウィンが提唱したいわゆる「進化論」を応用しており（註1）、この法則が生物のみならず人類のつくったモノにまで適用されることを証明しました。

考古学における型式 (type) は、形態で認識される最も低い分類単位です。時間的に限定され、一定範囲に反復して出現することから、考古学では編年研究を行う上で重視されます。

特に土器類は普遍的な道具で、大量に生産・消費されること、比較的短時間で形態変化をおこすことなどから、時間を計る「ものさし」として重宝されています。

今回の展示では、現在私たちが用いている道具の変遷を追うことにより、時の流れの中でどのようにモノが変化するのかを考察します。

註1 ダーウィンが提唱した説はむしろ「自然淘汰説」と呼ぶべきもので、考古学は当時の全体的な議論の中での「進化論」を応用したと考えるべきかもしれません



モンテリウスの示した「北ヨーロッパ青銅斧の変遷」
モンテリウス『オリエントとヨーロッパにおける古代文明期』1903